

戦術に夢中 広がるボッチャ人気

アスリートを支える

ナガセケンコー

(東京・墨田区)

開催中のリオデジャネイロ・パラリンピックで、「ボッチャ」に注目が集まっている。

包まれているため、野球のボールほど転がらない。30年近く前に欧州から導入され、国内の登録選手は約200人に広がった。

なじみの薄い競技だが、イタリア語で「ボール」の意味だ。白のジャックボール(目標球)を1球と、赤と青を6球ずつ使う。最初に白玉を転がして置き、これに、自分の球を近づけたら敵の球をはじき出したりして、白球に近い球の数を争う。カーリングに似て、高度な戦略が勝負を決することが少なくない。

ボールはほとんど輸入している。軟式野球などのボールのメーカーとして知られる「ナガセケンコー」(本社・東京都墨田区)の小室欽示次長(57)によると、1988年のソウル大会後に、取引先からデンマークの会社を紹介され、輸入するようになったという。

皮で包まれたボールは、硬式野球のボールよりひと回り大きく少し重い。だが、つまめるくらいに緩く

そのデンマークの会社の社長も障害があり、小室さんはカタログにボッチャの説明を入れたり、各地の教

ナガセケンコーの小室欽示さん(右)と内藤英一さん。ボッチャのボールはデンマークから輸入している。東京・墨田区



育委員会に働きかけたりするなど、国内での普及に協力してきた。

その結果、授業に採用する特別支援学校が各地で増

加。年間100セット余りだった販売実績は今年、300を超えた。さらに、レクリエーション用のボールも、初めて輸入した2年前は100セットだったのが、今年は250セットに増えたという。「支援学校の先生や地域の人たちの支えが実った」と小室さんは話す。

日本ボッチャ協会の村上光輝・強化指導部長(42)によると、最近は障害に関係なく広がっているという。「1球投げるごとに局面が変わり、戦術が試合を決める。企業などの体験会で教えると、みなさん休み時間

もやめないんですよ」

ボッチャの選手は重度の障害があるためコーチが介助役を兼ねるなど、合宿や国際大会でも、支援が必要な場合が多い。同協会は今後、選手の強化とともに、各地で体験会などを開いていく予定だ。(菅沼栄一郎)

